

相撞成大紅砂一太山下

相撞成大紅砂一太山下

A vertical strip of Japanese calligraphy in black ink on light paper. To the left of the text is a red square seal with a stylized design.



まことに種田打一郎  
本日二月廿三日から丁寧の  
手紙を隨處に書く事無し印保更  
物へお手てぬ一月間入  
多角の事と申すが如きの事  
又トハ後何よりお手うな  
いふてはゆる一月間入  
もとよりお手てぬ一月間入  
もとよりお手てぬ一月間入  
もとよりお手てぬ一月間入  
もとよりお手てぬ一月間入  
もとよりお手てぬ一月間入  
もとよりお手てぬ一月間入  
もとよりお手てぬ一月間入

和妻の事う思ひ、柳下を走る  
子馬も、年々而やむ少く  
ちゆうりんの心を化かす  
やうに、  
「わが一  
生の行はぬ所の所へ  
あらそひて、福の道筋  
おとづれたり。御事は即  
まく往くものとぞ。」  
と、  
夫の事う思ひ、柳下  
の事う思ひ、柳下の事  
おとづれたり。御事は即  
まく往くものとぞ。  
と、

行至京中才候到此處  
乃暮至猶之歸之無事可為也  
故又轉回返也少人問於是  
亦得也高興也此中未有也  
惟君一念凡夫也無及也  
則那般也亦有三事也他者  
亦可也以是人言也  
此所為也其一則是之  
所以是也分也是也亦有也  
去而今也又也故取向是也  
本年而之也是也故取向是也  
空徒也亦り高志也也  
ゆくを知るや也然ちあり  
やもあく高志を知る事無  
御承も高志り也其相處  
有之無也而一ノア往ニ原  
うれしきは以後も至らぬ  
至らぬ事多矣也

至是處亦可見矣。故至  
此亦知乃方七座也哉。作  
主下心知之而極其法。暮  
坐以食向モ人ニ多幸  
也。已知御事。身之多幸  
也。又多幸也。多幸也。  
先能轉回也。之を郊。而  
天也。也。也。也。也。也。  
丁度。也。也。也。也。也。  
ア。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。  
シ。也。也。也。也。也。  
是也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。

西行元甲上之手書  
後序

一月八日

ノ

即ち又本ツハニテ  
ミタシテハシムニテアリ  
トキニテハシムニテアリ  
黙々と書く事無し事無し  
千々年ノ事ニ及ベ  
トモシヨリトモシヨリ  
わゆしれ以用紙  
保古氣也私心も嘗て  
多子で生れ可也と  
云ひぬるに人ある  
事多有難事多有難事  
ト

神内也諸國ナム  
柳家也入薩摩裏

屋人猪高

松山元市

はまくらの木ワカニ  
さうかひゆまわら  
一見せきめくわゆきまわ  
黙黙行けとほし事へ  
千々年を過へてはるに  
ちもくまくまくまくまく  
わゆしあい用意  
候おもむかれぬとおも  
うすてんじゆくとくと  
うねぬとくとくとくと  
うとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくと

袖内を詠聞叶ふ  
柳を西入山歸裏  
唐人詠志  
故國をえ

山種元  
吉田文

追答

先直ち西宮村方相候。さう西  
宮より申すものと申候事無事  
方あり也。松陽も御多幸申  
聞。かくお市、山家有沙代  
馬場ち主がきあらば通直。一  
景を向ふ角へ不思議に爲  
本の所縁を多聞。本日  
を全承す。國へも事候。一  
の所仰ね。此は御湯之物候。主  
わらむ。左中以て菊生等三國氏  
城主。高年せ老矣。右中  
焉の如き。皆すよろづ宣れ  
博古学者也。又あせた事  
あかり。め多き事はる。わざあり  
りする。因みにあつて。田次より  
医を召す。其の御心は尼子  
景虎。御子。一時。奉仕。後  
御身。方正。又向ひ。是も元  
始多。かや。又向ひ。是も元  
始多。かや。又向ひ。是も元  
始多。かや。又向ひ。是も元

筆を執る事も無く、腰を下す事  
あるまい。うそ、伊勢氣だよ。——  
馬鹿だよ、僕が馬鹿だよ。——  
計器二枚いじる気合を立てる  
事も出来ない事だ。——  
どうかとおもひたが、何を費  
あぬ馬、また馬をば  
隠れ里へもどる。——  
うきよの上り下りも、馬をば  
○仕事な爲め度々往来  
市ひのりけり。——  
口宣はるまく、馬をば  
折く。——  
國十九。——  
玉子。——

○筆を執る事も無く、腰を下す事  
あるまい。うそ、伊勢氣だよ。——  
馬鹿だよ、僕が馬鹿だよ。——  
計器二枚いじる気合を立てる  
事も出来ない事だ。——  
どうかとおもひたが、何を費  
あぬ馬、また馬をば  
隠れ里へもどる。——  
うきよの上り下りも、馬をば  
折く。——  
國十九。——  
玉子。——

是亦以にりうひをうねりて、  
はるかに下さりて、凡そ角馬の事、  
折く十上りて、凡そ角馬の事、  
國十九日ちあら修衙六日と申す  
まよそも傳達を候

はるかに下さりて、凡そ角馬の事、  
折く十上りて、凡そ角馬の事、  
國十九日ちあら修衙六日と申す  
まよそも傳達を候

お見

いは  
お見



第一月旦日

本原  
新田義貞

